

「見返りを求めず こつこつと」

山口県 湘江庵住職 石井龍祐

今回は、お釈迦様が亡くなられて比較的早い時期に出来た、「法句経」というお経の一句をご紹介します。

あるお檀家さんのお宅にお伺いしたときの事です。四十代くらいの若いご夫婦から質問をされました。「仏教では、善い行いをすればお陰があるし、悪いことをすればその報いを受けると言いますが、今の世の中とてもそのようには思えません。どういふことでしょうか」と。ご夫婦は、いつもお仏壇を綺麗に調え、読経されています。実は数年前、夫が勤めていた会社が倒産し、再就職は出来たものの以前ほどの収入はなく困っておられました。先ほどの言葉は、こうした状況の中思わず出てしまった言葉のようでした。

そこで、ご紹介したのが、最初にお話した「法句経」の一句です。「その報いよも我に來たらざるべし」「かく思いて善きことを軽んずるなかれ。水の滴り滴りて水瓶を満たすがごとく、心ある人はついに善をみたまなり」「善いことをしたって、どうせ報われない。そのようなことはありません。しかし、善い行いをしたからといって、直ぐにそのお陰があるとは限らないということです。水道の蛇口から、ぽたりぽたりと落ちる僅かな水でも、朝になれば洗面器いっぱい水が溜まっているように、少しずつ少しずつ善い行いの功德が溜まっていくのです。瓶の大きさも様々で、小さなものから大きなものまであります。大きな瓶だと生きているうちに、功德でその瓶が満たされることはないかもしれません。けれども続けていけば、少しずつ少しずつ確実に溜まっていくのです。

善い行いをしたお陰を自分で受け取るというよりも、子や孫、後の世代の人に受け取ってもらおうといふくらいのおおらかな気持ちで実行されるとよいのではないのでしょうか。そのような気持ちで物事に当たれば、納得のいかないことだらけの世の中ですが、少し前向きな気持ちで生きていくことが出来るのではないのでしょうか。